

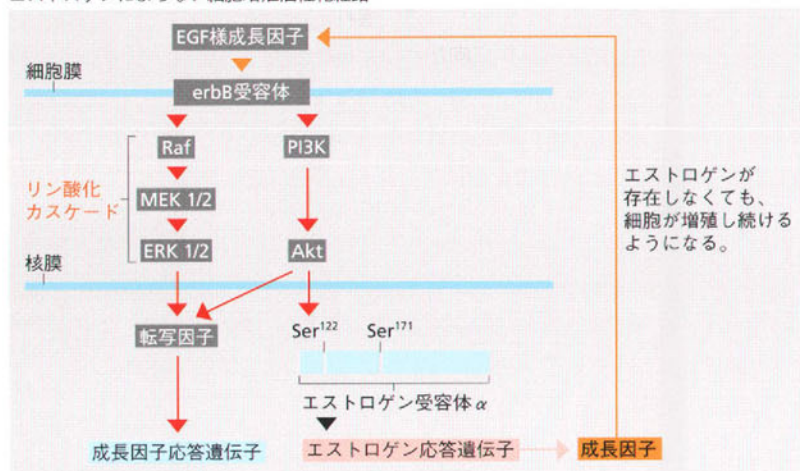
女性ホルモンによらない、生殖器官の細胞増殖メカニズムを解明

宮川信一 熊本大学 生命資源研究・支援センター



宮川信一
(みやがわ・しんいち)
分子生物機構論専攻。「マウス雌性生殖器官におけるエストロゲン非依存の細胞増殖機構の解析」で、2005年3月に長倉研究奨励賞を受ける。

エストロゲンによらない細胞増殖活性化経路



◆長倉研究奨励賞と総合研究大学院大学研究賞

総研大生の優秀な研究に対して、各専攻長が長倉研究奨励賞選考委員会に推薦。委員会の審議によって、「長倉研究奨励賞」受賞論文が選ばれる。また、受賞候補の中から優れた研究に「総合研究大学院大学研究賞」が贈られる。

インドネシア農村部の食文化を、多様な観点から分析

阿良田麻里子 (あらた・まりこ) 国立民族学博物館外来研究員

インドネシア共和国のスダ地方農村部には、独自の豊かな食文化が残されている。阿良田さんは、約2年にわたって、農村部の住民の家で寝食をともにし、その食生活やスダ語の言語表現のデータを収集。調理、食材、味わい方、共食の機会など、食文化に関わるさまざまなカテゴリーのありかたを分析した。そして、これらのカテゴリー化には、表面的な言語分析だけではわからないさまざまな要素が関与していること、一見単純に見える言語表現でも、適切に使用し理解するためには社会背

景に対する十分な知識が必要であること、などを明らかにした。

「生活文化は、あまりにも身近で当たり前のものであるために、異文化間の相違に気づきにくく、その違いがしばしば深刻な誤解や対立を生みます」。なじみのない生活習慣をただものめずらしく見るのではなく、その背景となる考え方を理解する努力が必要だと、阿良田さんは考える。

日本語教師として10年間外国人学生たちと関わってきたのが、研究生活に入った原点。そこで、異なる文化をもつ人々を理解する難しさを痛感。「インドネシア村落部での生活で、自分の文化に根ざしたものの見方の限界を破りたいと思いました」と話す。阿良田さんのような研究が、異文化間の摩擦の回避に役立てられることが期待される。



地域文化学専攻。「インドネシア・スダの食文化—言語人類学的観点から—」で、2005年3月に総研大研究賞を受ける。